

戸頃重基著

## 「日蓮の思想と鎌倉仏教」

本書は戸頃重基氏が学位論文に加筆したものであり、したがって、最近つぎつぎに出版されている日蓮聖人および日蓮主義思想に関する同じ著者の書物の中でも中心的なものといえよう。

近頃、仏教史学の発達にともない、親鸞、法然、道元等についての思想的的研究の労作がいくつか出版されているが、日蓮聖人についてのまじめな思想的研究書は少ないといつてよい。その意味から本書は今後の日蓮思想研究の分野に刺戟を与えることになろう。

戸頃氏は本書著述の目的を「鎌倉時代に形成し確立された日蓮の宗教を、他の鎌倉新仏教思想の文脈に位置づけながら、思想史学の方法に基いて研究する」ことにあると緒

言に記しているが、本書を通読して感ずることは、著者の日蓮聖人の思想に対する関心を方向づけているものが創価学会に公明党の進出や一方戦前のナショナリズム復活等の動きであろうということである。たしかに、この二つの、

正統な日蓮思想から外れる思想的流れは、日蓮宗の信者の中にも浅からぬ影響を見せているし、また同時に社会一般の日蓮理解の方向をも規制する面を持っている。このような時期に、日蓮聖人の思想を学問的に究明することは重要な意義をもつといつてよからう。

本書は、日蓮聖人の思想を中心に、その背景をなす鎌倉新仏教の思想的論理的構造を分析し、それによって各祖師の思想の矛盾点・限界を明らかにしようとしている。

本書の内容は、

第一編 護国思想の展開と変容

第二編 儒教の鎌倉仏教に及ぼした影響

第三編 末法観における歴史と信仰

第四編 罪惡観と武家宗教の造型

の四編からなっている。

第一編「護国思想の展開と受容」では、まず日蓮聖人の立正安国の思想が国家の手段に正法信仰を提供するものでなく、正法を信仰することを国家の目的とするものであったことをのべて、山川智応、姉崎正治氏らが日蓮聖人の国家観を国家主義的に誤解した誤まりをついた上で聖人の国家観の源泉を仏教経典（法華経および金光明、大集、仁、薬師の四経）と日本仏教の護国思想に求める。そして、大乘仏教が王権を是認しつつも、王権に対する仏法の優位を説いたことを指摘し、しかし大乘仏教のもつ世俗性容認は政治的に現在を享受する保主主義で、こゝに認められる否定の論理の欠如は現時点からは清算さるべき古代思想の残りかすであるとし、日本古代仏教の本質はこの仏教古来の世俗性をさらに深めたことをのべる。

ついで、このような前提に立ちながら、日蓮聖人の立正安国の思想の内容を鎌倉新仏教の他の祖師たちと比較しつ

つ検討する。正法治国を理想とする法華経を信じる以上、聖人は政治に対して関心を寄せざるを得なかったが、それは権力をかりて政教一致を実現しようとするものでなく、権力者に対して宗教者の分限の中で、正法を信奉するよう警策を与えることであつたとし、心法の救済が欠落した禅・念仏等に対し、聖人のこの着眼は現代からみても正しかったし、国家諫曉を事の一念三千として「まことののみち」を「世間の事法」の中で追求する聖人の思想は王朝時代の護国思想と全く同列にみならずとはできないと論じている。同時に立正安国思想が聖人滅後貴族的反動化のコースをとった点を問題とし、それは聖人の思想・行動自身に革新性をあいまいにする、現行の社会秩序を是認するものがあったためだと指摘している。著者はそれを古代仏教の鎮護国家思想の残滓とみて、親鸞や道元にもそれが認められることをあげ、聖人の場合においても支配階級の権力に屈従して王仏不二の教説に変化する必然性があつたとする。しかし、聖人のばあい古代仏教の残滓にすぎなかった鎮護国家への傾斜を深めたのは中世封建支配の枠の中で体制そのものに指一本ふれようとせず国立戒壇運動を展開した滅後の弟子たちであることを教団史に沿って明らかにしている。

そして、その中でとくに、著者は「三大秘法鈔」の真偽

問題をとりあげ、これこそが聖人の思想を鎮護国家思想へと逆行させた不潔きわまる偽書と断定する。その理由としてあげているのは、

一、三大秘法鈔の内容は仏法為本をふまえる聖人の王法批判の精神にそぐわない。

二、同鈔の名が宗史上にみえ出すのは祖滅百八十年を経た後である。

三、三大秘法の構造は一即三、三即一であって、戒壇だけを本尊と題目から分離できない。

四、同鈔と、「墓をば身延に立てさせ給へ」と書かれる「波木井殿御書」との間に思想上の謀作的な対応関係が指摘できる。

五、撰時鈔、報恩鈔と比較して、困難の由来としての国内とくに王臣の謗法破折なしに玉仏折衷の戒壇建立がのべられている。

六、上行の自覚の宣表に關し、本鈔の口決相承の天降り神祕的啓示の告白は人開顯の書である開目鈔と本質的に異なる。

七、全体として本鈔は聖人の一貫した王法折伏の思想が全くみられない。

そして、聖人の後半生に護國思想の挫折をみて、靈山往

詣の思想はその挫折の代償であると論じている。

第二編「儒教の鎌倉仏教に及ぼした影響」においては、俗世間の秩序の下における道徳を説く儒教と、現世の恩愛を否定して彼岸を求める仏教とは容易に融和がたいものを持つのに、この対立が混合の中で見失われたところに中世仏教思想の限界があるとして、聖人のばあい、親鸞・道元らと比較してとくに儒教の影響が強いことを指摘している。紙面の關係で、こゝでは詳しい紹介を避けるが、仏教本来の報恩は自然道徳であるのに、儒教という封建道徳の影響をこうむったところに鎌倉新仏教の意外に早い思想史的生命の終熄があったとみ、儒教の仏教に対する価値の劣性をはっきりとめながら他の誰よりも積極的に儒教を行動の規範としたのが日蓮聖人であったとする。そして、聖人の國家諫曉の行動は仏典からはみちびき出し得ないもので儒教から学びとったものであると論じている。

第三編「末法観における歴史と信仰」では聖人の末法思想と道理の觀念、愛國思想が論じられている。

第一章「末法観の背景と構造」では、聖人の末法思想が三類の怨敵とのたたかいを予想する強い主意主義に支えられたものであって、伝統的な無常感のペシミズムをほとんど伴っておらず、ペシミズムとオプチミズムは法華經の行

者の自覚を媒介として末法に挑む否定の精神として行動原理にまで止揚されていたと論じている。こゝでは、聖人における時の思想が、機を超越しながら機に内在し得るものであることを指摘しながら、聖人における時は空間原理としての国と結合して聖人独自の主体的な危機意識と主意主義的末法思想を形成したことがあげられている。

第二章「道理の歴史的自覚」においては、聖人が重んじた道理が教証と行証の統一から詮出されるもので、主知的な客観的性格を含んでいたが、現在の時点からみれば知識と価値の混同がみられ、そこに独断を避けて普遍の道理に到達しようとしながら、結局は独断におち入らざるを得なかった中世的思考の限界があったと論じている。

第三章「承久の乱にたいする日蓮の論評」第四章「蒙古襲来と日蓮の予言」で聖人の歴史的事件に対する論評をとり上げ、論評の基準が正法にあったことをのべているが、とくに第四章では、聖人が他国侵逼難をはっきり蒙古襲来と解釈するようになったのは文永六年以後のことであり、それ以前から当時の史書に蒙古襲来を予想したものがあつたこと、聖人が蒙古調伏の祈禱を行ったとの伝説は聖人が元寇を謗法治罰の摂理とみられていたことからあり得ないことや、弘安の役の台風による元軍の敗北は聖人の自信を喪

失させたとのべて、従来巷間に流布している予言者・愛国者日蓮のイメージを突ききずそうとしている。そして正法為本に立つ聖人は「救国の正法を誹謗する邪法の日本にたいし、彼は愛国僧としてとどまることを断念した」のであり、「国家や民族の特殊の価値だけを盲目的に信じて、人類普遍の原理を否認することが、愛国的であるというならば、日蓮を愛国者とよぶことは適切で」はなく、逆に「国家や民族の特殊の価値を、普遍的価値に従属させることが愛国への確かな道であるとするならば、日蓮はこの道を歩んだ愛国者およびよぶことができるだろう」とのべている。

第四編「宗教の不生命思想と折伏主義の背景」においては日蓮聖人の「刀杖持戒」と「謗法斬罪論」を中心にとりあげて、こゝにみられるものが「不生命思想」であると論ずる。そして聖人のこの「不生命思想」の由来は、一つは聖人の武家的資質に、いま一つは仏教思想そのものの本質に求めている。著者は、聖人が刀杖持戒を誹き、謗法斬罪を許すのは、いわばよくよくの限界状況におけるものであり、支配者から不法な弾圧をこうむっていた聖人に復讐的言辭があることを理由に、聖人を暴力主義者とときめつけるのは誤りであり、暴力を防ぐための実力までも暴力とよぶのは適切でない、としつつも、聖人は生命犯一般を罪惡視

する倫理思想に達しておらず、私的な仇討ちすらみとめた聖人は、「進歩的な世俗倫理の水準にまだ達していなかった」とのべている。聖人のこのような「不生命思想」の仏教的根元について、著者はドイツの仏教学者ワルター・ルーベンの「人が搾取されていることに関してでなく、働かねばならぬことに関してなされる同情、及び大地にまでも同情心をひろげ、従って同情を抽象的且つ非人間的ならしめる無制限な誇張は、仏教の宣教には特徴的なものである」ということばを引用して、このような慈悲は余りにも人間離れしており、反人間的・非人間的ですらあるとし、仏教が戦争を否定する平和の倫理をみちびき出せなかったのはこの無制限な慈悲の誇張と無関係ではないという。もう一つ著者がこの点に関してあげているのは末法無戒思想で、末法無戒の主張が信仰の功力を強調する逆説の結果として生命犯にたいする倫理的罪悪感の運鈍をもたらし、とのべている。

著者はさらに、仏教がフアシズムに抵抗して人間中心の生命思想を強く展開できなかつたいま一つの理由として、死生観の問題をあげる。無上道のために生命を惜しまぬ理想主義的傾向が結果として生命軽視の觀念をみちびいたとし、このような思想は、人生を実体としてでなく因縁仮和

合とみ、それを苦・空・無常・無我としてとらえ、そこからの解脱を目的とした仏教の根本思想にもとずくとする。そして、「近代日本仏教から、平和の思想も運動もおこりえなかった思想的根源は、実に深く遠いものがある」と結論している。

以上本書の内容を要約したが、これによっても知られるとおり、著者の提出している問題はすぐれて今日的な問題であり、現代人の社会倫理にかかわる問題である。それだけに、ここに出された問題は、単に日蓮聖人の思想をどうみるかということよりも、日蓮聖人の遺訓につき動かされて生きようとする者にとっては、自分自身の生き方を問われる問題である、ということができる。おそらくは著者のねらいもまたそこにあつたと想像される。

しかし、それが学問的な著作として発表されるばあいに必要なのは、第一には著者の主観をおさえて、まず研究対象（日蓮聖人）そのものに沈潜し、その論理を内面的に把握することではなからうか。その上に立って、はじめて研究対象から距離をおいての批評が意義あるものとなると考えられるのである。

そのような研究態度は対象に切り込むと同時に、自己もまたそれによって切りつけられることが避けられないもの

であり、そして、そのことが研究者自身の思想の深化をもたらし結果をみちびくのであるが、本書のばあい、著者はみずからの判断・思想を正しいものと仮定してかかっているように見受けられるが、これはこの著作の根本的な欠陥であると思われる。著者は「あとがき」で「親鸞ノート」を書いた歴史学者服部之聡氏との邂逅を語り、それが著者の日蓮研究の重要な縁になったとのべているが、服部氏の親鸞研究と著者の日蓮研究には叙上の点で大きな開きがありとめられるのは残念である。

本書の記述するところについて批評したいことはあまりにも多く、こゝにその一部についても記述する余裕を持たないので、いずれ、時を改めて詳しく論じたいと思うが、こゝでは、二、三の点だけをあげておきたい。

第一に、一宗の開祖の思想を論ずるばあい忘れてならないことは、その祖師の思想が仏教思想上どのような位置を占め、どのような役割を果たしたかということである。日本仏教史の流れの中で、聖人の法華経至上主義をどう位置づけるかという点が本書では、論文の構造全体から脱落している。そのことが、聖人の思想を折衷主義として安易に片付ける著者の態度を導き出しているが、著者自身いうとおり、複雑な問題をはらみ単純明瞭でなかった聖人の思想を

理解する上での第一のカギはこの点にあるのではないか、ということを描きつけておきたい。

第二に、著者の仏教理解が著者独自の仏教研究にもとずいていないのではないか、ということである。たとえば、著者は「法華思想の特色は、理想と現実の和解から生じる折衷主義の点にみいだされる」とのべ、法華経の在家肯定はインドにおける出家生活に対する社会的非難によるとのべているが、これは経典成立に関する著者の知識が仏教学者の書いた啓蒙書にたよる程度のものではないかという疑いを懐かせる。また、法華経の皆順正法や国土嚴淨のことが現状肯定の反革命思想であるとか、日蓮聖人の靈山往詣思想が即身成仏思想と矛盾するとか、さらに惨虐な侵略者であり真言密教の影響を受けていた蒙古を誇国膺懲の天使とする解釈は聖人の蒙古仏教に通じていなかった証拠であるとかがい記述は、仏教の論理構造を著者が理解し得ないことに著者自身気づかねばなるまい。

第三に、これは第一の点と関連することであるが、とくに第四編にのべられた著者の不殺生思想について一言しておきたい。著者はガンジー主義あるいはクエーカー教の不殺生思想に絶対基準を見出しているかと思われる。私自身もそれらの絶対非暴力の思想・信条に生きる人びとに対し

て尊敬をいざくことにおいてはやぶさかでないが、著者のいうが如くにそれに進歩的倫理として客観的・絶対的価値をおくということには簡単に同意できない。ましてや仏教の中から戦争に反対する思想が生まれ得なかった理由として、仏教の倫理が絶対非暴力主義に到達していないことをあげるのは、あまりに主観的態度といわざるを得ない。歴史的に絶対非暴力の立場でなくとも、強い反戦の態度を貫いた人びとがあることは実証されているのだし、非暴力が時に侵略者の暴力肯定の役割さえになうことがあるのを指摘しておきたい。仏教に平和実現の力がない理由は、著者のいう科学的な立場からは、仏教者の支配権力に対する弱さと、科学的・社会観の欠如にこそ求められるべきであろう。こゝには、とくに著者が自らの価値観をもって無謬とするあやまった学的態度がみられる。

第四に、全体的に、著者はもっと慎重に表現をえらぶべきではないか、ということである。充分な研究の結果というよりは、著者の恣意的な感想とみられる表現が散見されるのは本書の研究書としての品位を傷つけている。

以上あげた点は部分的なものではなく、本書の記述全体に及ぶものであり、本書に提示した著者の重要な問題意識にもかかわらず、そしてまた著者の意図に反して、本書の

価値を低め、読者に日蓮聖人を誤解させる面も少くないと考えられる。力のこもった著作であるだけに惜しまれる。だが、このような欠陥を持つものであっても、本書が、過去のあやまった聖人観を是正し現代における日蓮聖人観を築き上げてゆくために、批判的に多くの識者や学究の徒によって読まれる必要がある書物であることは強調しなければならぬであろう。

(近江幸正)